

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

言霊幸倍へ 1

その 401

言霊の幸倍へ 三題

言霊の幸倍へという言葉が出てきましたので それに因んだ三つのことを列挙しておきましょう。

まず第1には今まで説明してきました。タトヨツテヤユエケメ・クムスルソセホへ・フモハヌ・ラサロレノネカマナコ の三十二音であります。物事の実相を構成する三十二の子音言霊の生まれ出てくる心の過程を、その生まれてる三十二の子音の配列によって示した、言霊の妙であります。

第2は世に、いろは歌として知られています「いろは四十七文字」のことです。

イロハニホヘト・チリヌルヲ・ワカヨタレソツネナラム・ウキノオクヤマケフコエテ・アサキユメシシエヒモセス

このいろは歌は物事の実相の意味を考えることによって、その実相が生まれる以前の宇宙（空）に帰る方法を、明らかにしたものです。四十七の言霊を重複することなく、全部並べることによって、その言葉が生まれる以前の心の宇宙に変える方法を示しました。麻邇（言霊）を以て麻邇以前に帰る道を示すということでも運用の妙であります。

第3は 石上神宮（奈良県）に伝わる「^{ふる}希留の^{こともと}言本」と呼ばれる言霊の運用法です
ヒフミヨイムナヤコトモチ・ロラネシキル・ユキツハネヌ・ソヲタハクメ・カ・ウ
オエニサリヘテノマス・アセエホレケ この歌は、言霊四十七個を重複することなく並べることによって、古神道で禊祓い、すなわち文明創造の政治の方法を説いたものです。言霊の原理の運用による歴史想像の心構えを言霊全部の配列によって示すという言霊の幸倍へ、であります。

以上言霊運用の妙三題書きました。言霊の原理に通じてきますと、現代の常識を超えた霊妙な力が言霊布斗麻邇には備わっているということに、お気づきいただけると思う次第であります。

その402につづく

「古事記と言霊」島田正路氏著書より抜粋

言霊幸倍へ2

その402

火の夜芸速男（やぎはやお）の神。またの名は火の炫毘古（かがやひこ）の神、またの名は火の迦具土（かぐつち）の神。

言霊ン：古事記神代の巻 天の御中主の神に始まる神名がこの火の夜芸速男の神に来てちょうど五十番目となります。五十音言霊を示す最後の神名です。火の夜芸速男の神とは、火は言霊のこと、夜芸（やぎ）の夜（や）は夜（よる）の国、夜見または読みのことであり、芸（ぎ）は芸術の事と成ります。全体で言霊の読みの芸術が早く示されている存在、とういうほどの意味となります。これは正しく文字のことでありましょう。文字は言葉が眠っている夜の芸術です。

またの名である火の炫毘古（かがやひこ）とは、文字を読みますと言葉となって脳裏に意味が蘇ってきて、言霊が輝いているのがわかりますから、その名前があります。

またの名の火の迦具土の神の「ほ」は言霊、迦具土とは書く土の謎です。昔五十音を粘土板に書き込みましたので火の迦具土の神と名付けました。書き込んで粘土板を窯で焼いて素焼きのクレータプレットを甕（みか）と言いました。

鹿島神宮のご祭神である武甕槌（たけみかづち）の神の甕（みか）も同じ意味です。甕の神は甕神（みかがみ）で御鏡（みかがみ）に通じることになります。大和三山の一つ、天の香具山の名は迦具土と同様、文字の意味を持たした抽象的な名前です。古事記にある「常世の国の香久（かぐ）の果（このみ）」とは橘（たちばな）、すなわち蜜柑（みかん）の古い名だと思われていますが、実は香久（かぐ）は迦具（かぐ）と同

じで文字のことであり、常世の文字ですから、漢字のことを指したものです。

火の夜芸速男神と示された神代表音文字には数多くのものが作られました。そのそれぞれの解説は交渉で取り上げられます。

火の夜芸速男神・言霊ンの出現によって五十音言霊のすべてが出揃いました。伊耶那岐・美二神の子生みの仕事はここに終わり、次に生まれた五十音を整理運用して、人間の行為の基準となる精神構造を作る作業が始まることと成ります。

注一：五十音言霊とは先天十七音、後天三十二音それに神代表音文字一音計五十音である。この事情を中国の易経では単に数字で示して「大衍（たいえん）の数五十、その用（はたらき）四十九」と言っている。大衍（たいえん）の訓読みが「ふとしく」であるから、布斗麻邇言霊五十音を宣べ広げる即ち敷衍（ふえん）する事の意味に通じる。大祓い祝詞の中の「下津磐根（したついはね）に宮柱太敷立て」という言葉も同様の観点から見ることができる。

その 403 につづく

島田正路著「コトタマ学」会報集 上より抜粋

言霊幸倍へ 3

その 403

「いろはにほへと・・・」の読み解き と子音と精神宇宙

主体と客体 母音と半母音が父韻の刺激によって 感応同交すると、全部で 32 個の子音が生まれる。母音半母音や父韻が まだ現象として現れる前の先天（空相）の要素であるのに対し、32 の子音は 姿を現した後天現象（実相）の要素であることは今まで度々説明した。この 32 の言霊子音の 1 つ 1 つを 神として祀る神社が日本各地にあ

る。

石鎚神社は四国は愛媛県西条市に本社がある。本社のほかに石鎚山山頂に頂上社、登山口に成就社(中社)がある。御祭神は古事記神代巻にある石土毘古の神言靈トえんの役小角おずのの創祀と聞きされている。石鎚神社が祀る石土毘古の神の正体である言靈トを解説するについて、今はあまり世間で知られて居ないことをお話ししましょう。読者は「いろは」四十八文字をご存じであろう。四十八文字を一字も重複することなく、全部使って見事に一つの歌をつくっている。一般には弘法大師の作といわれているが実はもっと古いもののようなのである。

いろはにほへとちりぬるを (色は匂えど散りぬるを)
 わかよたれそつねならむ (我が世誰ぞ常ならん)
 ういのおくやまけふこえて (憂いの奥山今日越えて)
 あさきゆめみしえひもせずん (あさき夢見し酔いもせずん)
 いろは歌を上のように四節に区切って、その意味するところ漢詩して表してみると

諸行無常

是れ消滅の法なり

生滅滅おわし已れば

寂滅して楽しみと為す

となる。この世の中にあるものは何1つとして永久に存在するものはない。

この常のないということが世の中に存在するものの法則なのだ。

生まれ出たり滅び去ったりする世の中のことに 心の拠り所を求めることをしなくなれば、

煩悩のない楽しみの境地に住することができるのだ、という意味である。

その 404 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 4

その 404

この世の中に起こる出来事をよく観察して、終わりにすべてのものは空に他ならない、ということに気づき、一切の現象が出てくる根源の心の宇宙を自覚する心構えと手順を説いたのが、いろは四十八文字なのである。

と同時にこの手順を示す四十八文字が、その空である心の宇宙の中にある全ての要素五十言霊を表している。

以上のいろは歌の内容の示す意義を頭に入れておいて、古事記の伊耶那岐・美神が 三十三の子を生んで行く順序を考えてみよう。「既に国を生み^ま竟へてさらに神を生みたまひき。かれ生みたふ神の名は大事忍男の神。次に石土^{いはすひこ}毘古の神を生みたひき、次に石巢^{いはすひめ}比売の神を生みたまひ・・・」と古事記にある。そして生まれてきたこの神は第一段階として大事忍男の神より火の迦具土神まで三十三神である。（「ん」文字化を含む）

この三十三の神名が言霊の子音を表示しているのであって、神名の指示する順序に従って言霊を並べてみると

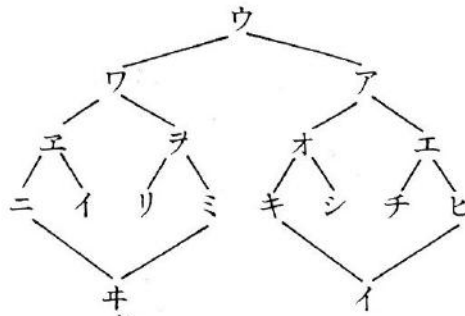
タトヨツテヤユエケメ　クムスルソセホヘ　フモハヌ　ラサロレノネカマナコ
ン

となる。

次の図を参照願います。

図 19

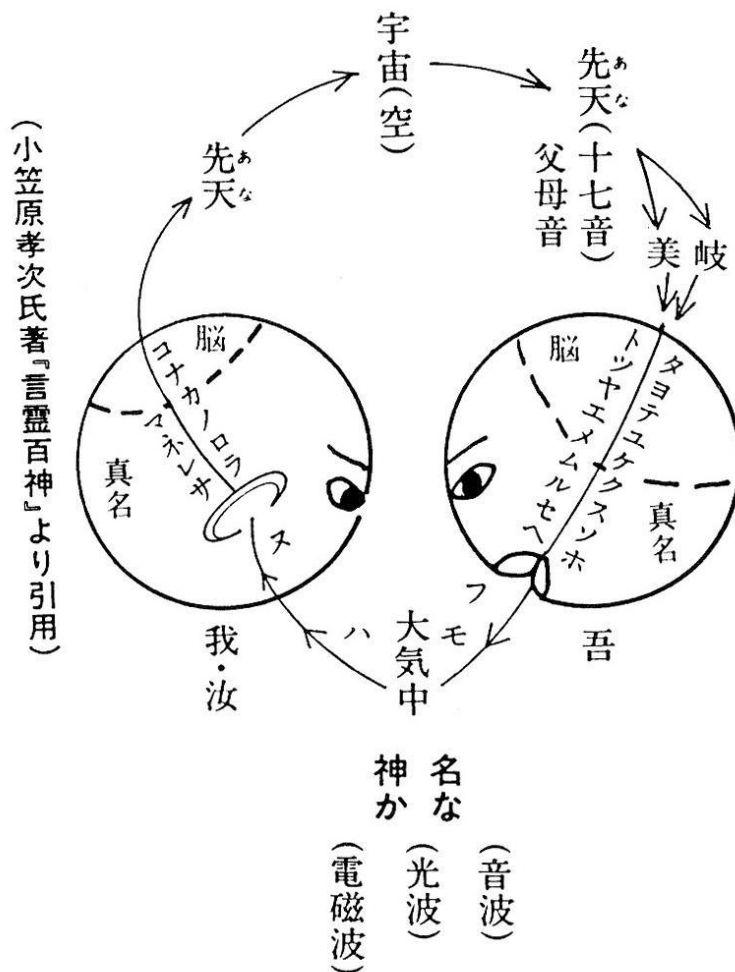
先天十七



タトヨツテヤユエケメクムスルソセホヘフモハヌラサロレノネカマナコ
 ↓
 シン

後天三十三

計五十



心の宇宙の中で先天である十七個の言霊が振動すると、逐次現象が生まれてくるとは言っても先天が活動したからといって、頭脳の手順としてはすぐに現象としての言葉が出てくるわけではない。先天が動いた後で頭脳の中で状況・習慣・気力の大小などの取捨選択が行われる。この段階が「タトヨツテヤユエケメ」の十言霊である。

次に頭脳内で出来上がってきてまだ言葉にならないイメージを、言葉として組み表現する段階となる。この段階が「クムスルソセホへ」の八言霊である。

その405につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ5

その405

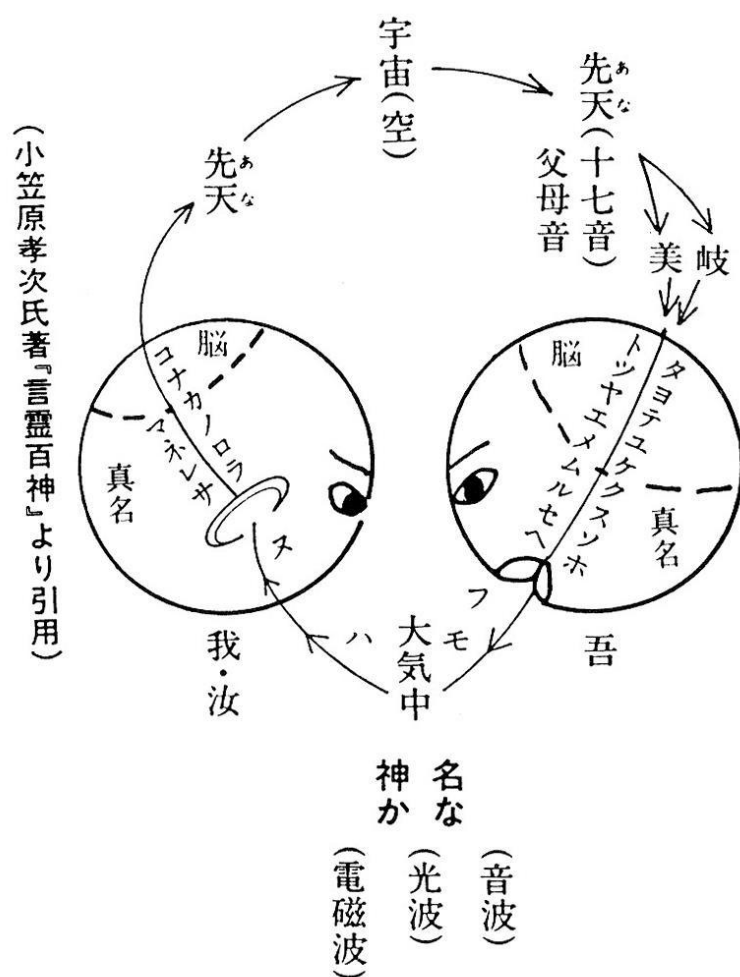
言葉として生まれて発音された言葉は空中を飛んで行く、人間の体を離れたからといっ

てその言葉は単なる音となるのではない、言霊として言（音）と霊（心）を備えている。
この飛んでいる 段階が「フモハヌ」の四言霊である。

言葉として発音されその言葉が空中に飛んでいったから現象は完結したかと言うとそうではない。喉が渴いたと思って奥さんに「お茶」と言っただけでは現象は完結しない。その言葉を奥さんが聞いて、「今うちの旦那は何か言ったが、そうだお茶が欲しいと言ったんだな」と了解することで1つの現象は完結する。

発音された言葉が自分であれまた他人であれ耳で聞かれてず脳内で再びあれかこれかと咀嚼され「ああ、こうだったんだ」と了解されて初めて現象は終了する。この受け入れられて了解される段階が「ラサロレノネカマナコ」の十言霊である。最後の言霊コで現象としての子が生まれるのである。言霊コの次の言霊ンは了解され承認された内容のイメージ化である。神代文字化を現わしている。そして 了解され終了した一つの現象行為は記憶となって再び心の宇宙である元の先天に帰っていくこととなる。

図の挿入



以上のように検討してみると、頭脳の先天構造が、活動をはじめ、種々の取捨選択の後に言葉として生まれ発音されて、口から飛び出しそれが耳で聞かれ復誦検査され、了解されて一つの現象が終了するまでに、心の宇宙の中で先天後天の言霊五十音が全て活動することが理解されるであろう。そしてこの心の活動の一循環の過程が、心の宇宙のすべてなのである。

この一循環の手順以外に心の活動はあり得ない。人間の行為は千差万別無数であるが、いちど言霊の立場に帰って現象を見ると、この五十個の言霊で一切が表現されるのである。そして現象である言霊子音を生んで行く三十三の手順生まれてくる三十三の子音

によって表現したのである。このような表現の妙を言霊の幸倍^{さちば}へと呼ぶ。
その 406 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 6

その 406

さて先天の活動によって生まれてくる子音のうち 第 2 番目にある石土毘古の神言霊トとはいかなる言霊なのか。

先天脳活動が起きると子音をタトヨ・・・と生む。その 1 番目の言霊タ（大事忍男「おおごとおしお」の神）とは度々説明するように田に通じる。タとは稲を育む処。稲（いね）とは イの音で言霊のこと。田の形は五十音言霊図に似ている。すなわち言霊タとは言霊図全体という言霊で捉えた人間の人格全部ということである。

剣道の試合で相手に向かって自分の全身全霊で打ち込むときの気合は、タチツテトのタの行の音を使うことによって了解されるであろう。日常茶飯の行為も、その始まりでは人格全体が躍動するのであり、一挙手一投足にも、人間の全人格がにじみ出てくるのも、この始まりの言霊タによるのである。

全人格である「タ」と生まれ現れたものが、現実に社会の中の行為となっていくために二つ脳関門を通ることとなる。その関門の役目をするのが第二と第三番目に生まれる子音トとヨである。

現れ出た全人格の前に戸（ト）が立てられている。どんな戸か。十の戸である。言霊でトと言えば明らかにポイント母音・半母音並びにその二つに挟まれている八つの父韻計十個の言霊すなわち言霊図の横の一行のことである。

これも今まで度々説明したことで人間行為が ウ（欲望）・オ（経験知）・ア（感情）・エ（実践智）の内のどの次元で行われるかは 八つの父韻の配列によって定まる。全人格の現れである「タ」はまずこの父韻の配列という主体的な意志の法則の関門を通り規制されて形作られていく。

人格全体である「タ」が言霊音図の横の列十個の戸によって主体的に規制され、

形を与えられた次に、言霊ヨ 石巢比売（いはすひめ）の神によってさらに定まった形に作られていく。言霊ヨとは四であり世である。トによる主体的な規制の次に「ヨ」による客観的な規制を受けるのである。一つの思いが社会の中で実現してゆくためには世の中のしきたり（慣習）に従う必要がある。世の中の現象は四つの母音ウオアエの次元で形成されている。

世と四の言霊法則上の関連を理解されるであろう。石土毘古（いはつちひこ）の神の石は五十葉で言霊のこと。土とは主体的に（毘古）を育むところ。石巢比売（いはすひめ）の神の巢は生命活動が生まれてくる住家の意味。

その 407 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 7

その 407

以上先天構造が活動を起こして、現象として現れた最初の全人格的なエネルギーが「タ」が、次に生まれる言霊 ト と ヨ という主体と客体の法則によって規制され 形成されていく過程を説明したしてきたが、この過程的な説明の中に読者が「言霊ト」というものの内容を汲み取っていただければと希望している。言霊トとは世の中に存在している一切のものや 事の名の中にある「と」と呼ばれるものの内容・意味のすべてを含んでいる言霊なのである。

言霊五十音図の中で母音半母音それに父韻については、古代の宗教東洋哲学・易経等の教理の中で、極めて概念的にはあるが、ある程度説明されてきた。しかしこれらの活動によって生まれてくる現象の単位である三十二この子音についてはその概念的な記述さえもない。ただ実相（真実の姿）といい「柳は緑、花は紅」などと芸術的な表現があるだけであった。

真実の姿とは何であろうか。「群盲象を評す」ということわざがある。盲目の一人が象に触って「鼻の長いもの」と言った。次の一人は「皮膚がざらざらしたもの」と言い、次の一人は「どっしりと重そうなもの」と評した。物事はそれぞれの見方によって異なる姿に見える。しかし象という動物の真実の姿はただ一つしかありえない、このただ一つしかない姿を実相という。この実相を調べていくと究極的には三十二個の単位があり、その一つ一つに三十二個の子音を結び付け名をつけたことは、日本古神道言霊学の世界の中で唯一・独特のものなのである。

事実そのものの要素のことであるからそのものズバリの説明の方法のない。それゆえにこそ人間精神の秘宝と言われ、キリスト教で「神の口より出ずる言葉」と呼ばれ、仏教で麻迦宝珠とたとえられてきたのであった。そうであるから先に述べた人間の心を構成する構成する五十この言葉の言霊の循環という新しい立場からの石土毘古（いはつちひこ）の神（言霊ト）についての解説が、今後の言霊学の研究者にとって実相の単位である言霊子音を理解する上で少しでも役に立つことができるならば筆者は無上の光栄なのである。

石土神社を創建した役小角（えんのおずの）行者とはいかなる人であったかその生涯についてはほとんど伝わっていない。ただ日本全国を行脚して各地神社霊場を創紀したこと、またその奇矯な言動により時の朝廷より憎まれ、伊豆の大島へ流罪になったことが伝えられている。流された年は奈良に遷都が行われる前、文武天皇三年（699年）であった。

その 408 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 8

その 408

役小角が生きた時代とは、言霊学の見地から日本歴史を見た場合にいかなる時であったであろうか。第十代崇神天皇が言霊原理を神として神社に祀って以来、約 700 年言霊に関する日本人の意識が漸く消滅していこうとする時であった。日本の伝統を守ろうとする人々はこの言霊の原理を後世に残そうとして種々の手段を講じつつある時でもある。

伊勢神宮の式年遷宮の制度を定めて、五十音言霊の象徴である神宮の唯一神明造の構造様式を永く後世に残す策が講じられた（天武天皇十三年 685 年）、元明天皇五年（712 年）太安万侶によって言霊原理の教科書である古事記が撰上され次いで元正天皇四年（720 年）日本書紀が編纂された。今日言霊原理は完全な姿で復活することができたのも、この二書の教えに負うところ大なのである。

時の朝廷によるこれらの政策が行われる真っ最中に役小角の各神社創紀の活動が行われ、また伊豆への流罪が行われているこのことから推察すると、言霊原理の伝統護守の運動から見て、朝廷内の正当な言霊学者からすれば役小角運動はアウトサイダー的存在であったのかもしれない。あるいは言霊伝統を後世に残す遺すための朝廷の種々の施策を生ぬるいとして、役小角が急進的行動に出たのかもしれない。

その当時の経緯がどうであったにせよ、現在日本各地に残る役小角創建になる伝えられる神社・霊場に筆者自身置いてみると、その業績と不撓不屈の精神が今もなお彼を生きてある如く感ぜられるのである。役小角の言霊学上または歴史上の功績は極めて大であるといえることができる。

その 409 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋
抜粋

言霊幸倍へ 9
その 409

日文（ひふみ）

誰でも。知っているいろは四十七文字は、重複することなく五十音を使って、人間人事の現象から、その現象の根元の宇宙へ帰る道を、仏教で言えば、実相から空相への悟りの道を、といったものである。一般に弘法大師の作といわれているが、実はもっと古くからあったものようである。

簡単に説明すると次のようになる。

いろはにほへとちりぬるを 諸行無常

この世にあるものはすべて変転極まりないものである。

わかよたれそつねならむ 是生滅法

これがこの世にあるもののあるべき姿なのである。

うゑのおくやまけふこえて 生滅滅己

このはかないものに執着する心を無くしてしまえば。

あさきゆめみしゑひもせす 寂滅為楽

生死輪廻の起こらない悟りの境地に入り、永遠の楽しみの世界に住することができる。

この「いろは」に対し。あまり人に知られて居ないが、大和石上（いそのかみ）神宮に伝わるひふみ四十七

七文字というのがある。これも重複することなく五十音を使って人間生命の重要な働きを示している。

ヒフミヨイムナヤコトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハクメカウオエニサリヘテノマスアセエホレケ

これを石上神宮の「布留（ふる）の言本（こともと）日文（ひふみ）四十七文字」と呼んでいる。少なくとも三千年近く同神宮に伝えられていることが知られているが、幕末の平田篤胤（あつたね）による心霊的解釈一片がある他は、その意味がまだ不明であった。しかし解明された言霊の原理による時、その意味は余すところなく明らかとなる。今よりその説明に入ることになろう。

その 410 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋
言霊幸倍へ 10

その 410

ひふみ祝詞

大和石上神宮に伝わる ひふみ四十七文字 「布留の言本日文四十七文字」

ヒフミヨイムナヤコトモチ ロナネシキル ユキツワヌ ソヲハタクメ カウオエニサリ
エテ ノマスアセエホレケ

の意味

ヒフミヨイムナヤコトモチ

一三四五六七八九十 の事、ただし、ただの数字でないことはもちろんである。言霊学的に十というときは横に中十の言霊が備わった音図、すなわち母音である純粹自我の主体性が確立され、同時に一念のうちに半母音である結論も完備され、その双方の間に八父韻が揃っている音図、すなわち天津祝詞音図のことである。古神道では、十拳剣と呼んでいる。モチとは、百千（もと）をはめる人がいるが、この場合はもってが正しい。意味は「人間精神の最高の規範である天津太祝詞音図の横十個の配列すなわち自覚された主体と客体の双方を結んで現象を起こさせる八つの父韻の原律をもって、」
という意味になる。

ロナネシキル

ロラの音を仕切るの意である。ロラの音は何なのであろうか？ここで古事記神代の巻の伊耶那岐・美二神子生みの章を引用することにしよう。岐・美二神とは人間生命の創造伊斯のことである。古事記で言う「天津神諸々の命」すなわち人間精神の先天構造である五段階の天津磐境の活動が始まり、次々と現象の最小単位である後天三十二子音を生んでゆく。

その順序は古事記の神名に五十音の単音を当てはめて書くと大事忍男の神。=言霊タに始まって大宜都比売の神=言霊コ、ここに至るまで。タトヨツテヤユエケメクムスルソセホヘフモハヌラサロレノネカマナコの三十二子音である。これで天の御中主の神=言霊ウより伊耶那美の神=言霊キまでの先天十七音と後天の最小単位である三十二子音、それに字を表わす火の迦具土の神=言霊ンを合わせて五十音の全部が揃ったこととなる。精神宇宙は、この五十個の言霊ですべて完結する。実在としては宇宙にはこれ以外の要素はない。その411につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ11

その411

ここで熟考を要することがある。人間の精神活動という極めて複雑多岐にわたっている。しかし、この精神活動を最も単純にコンパクトに縮小したら次のように言うことができるであろう。まず、人間の頭脳内に何かが起こる。先天活動の先天構造の活動である。

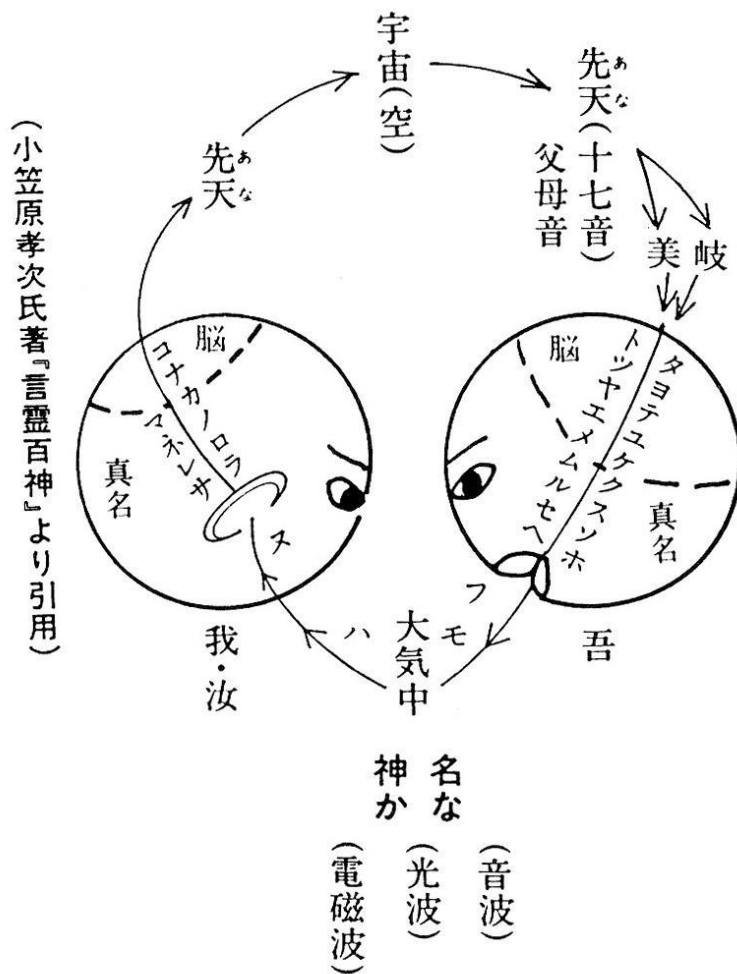
それが次第に具体化し、ついに現実の言葉としてまとまり、口より発音され、空中をその声が渡って、再び人間の（自分でも他人でも良い）耳に入り検討され了解に達し。一つの事実を形成して、人間の先天部分に収まって終わる。これだけで全部である。この一瞬とも言える短時間の精神活動の一循環の中に宇宙の全要素が揃っているということができる。

古事記の子生みの章には、大事忍男の神以下神々の名が次々に出てくる。それだけでは全く何の意味があるのかわからないけれども、古事記の神代の巻が言霊原理の教科書であり、子生みとは子音の理解のための章であることがわかると謎は次々に解けてくる。

古事記神代の子生みの章に出てくる三十二の神名には三十二の子音をそれぞれ当てはめることは1個人の能力では不可能に近い難問である。1人の科学者が物質の元素を全部発見確認すると等しい事業であろう。けれど長い間、宮中賢所に秘蔵され。明治天皇の時以来、次第に民間に流布されたといわれるこの古事記の神名と三十二子音との照合を実際に受け入れてみると、その合理性に驚嘆せざるを得ないことになる。

日本の大和言葉とは、その精神構造の最奥の原理によって、合理的に作り出された言葉であることが今更の如く了解されるのである。この子生み三十二神の神名にそれぞれ子音を当てはめて、宇宙精神の一循環を図示したのが下図である。人間が一つの言葉を発するのには、精神の全宇宙の活動があることを確認することができよう。本題に戻ろう。ロラの音は下図で見る時に一度発音され空中を飛んだ音が再び耳の中に入ってきたところの音であることを示している。

「ロラ音仕切る」とは耳に飛び込んできた言葉を、天津太祝詞音図の父韻の配列の順「イチキミヒリニイシキ」で仕切って見よということである。



その412につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ12

その412

ユキツワヌ

ユキは結え。ツワのツとは図にあるごとく先天が活動を開始し、次第に具体化し、全身全霊の躍動で田と姿を現したものがト(十、すなわち人間性の全体)とヨ(漢字を当てはめると世すなわち社会通念)の二つの篩いを通して“ツ”と出てくる音である。ワはもちろん結果を意味する。(以上本論、母音の項を参照。)又は貫で横を意味する。以上で、言葉の意味を最初から結果を順に、横に結べ、と言うことである。各並べてみると耳に入ってきた言葉の真の実装がよく理解されることとなる。

ソヲタハクメ。

タハとは田すなわち言霊図の言葉の意。それを言霊図に示される言霊を持って組めということ。

カウオエニサリヘテ

伝わってきた相手の言葉を言霊ではっきりと順序よく組んで実相が判明すると。それに対する答えが心の中に焼き付くごとく“カ”と浮かびあがる。その答えをウオエ、すなわちウ（欲望）、オ（経験知）、エ（創造英智）三つの次元に区別しての意である。

ノマスアセエホレケ。

エとはあ天津太祝詞音図で判断した創造選択智の結論。アセとはア言霊の段の瀬。言霊図の横の配列は生命の川の流れて瀬と言われる。無限宇宙の自覚に基いた愛情、慈悲の心の流れ。ホレケに漢字を当てると秀列気、すぐれた列の気。そこでノマスアセエホレケとは愛と慈悲の心で創造のための結論を言葉の筋道がすっきり通るように述べようということになる。

以上を全部まとめてみると

「天津太祝詞音図を鏡として。相手の言葉を審判・判断して、その内容を言霊にまで還元して実相を余すところなく把握し、その上で相手が新しい創造の生命を得られるように。ウオエ各次元を混同することなく、はっきりとそのゆく道を宣べ、指示せよ」ということである。

その 413 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 13

その 413

このように判明してみると日文四十七文字は本論で述べた父韻の配列と人間の心の持ち方の項で説明した如く天津太祝詞音図の横の配列、ア・タカマハラナヤサ・ワ（イ・チキミシリニイシ・サ）と全く同様の意味であることに気づかれるであろう。日文 47 文字はア・タカマハラナヤサ・ワの心の操作をさらに詳しく言霊でもって説いた文章であるということができる。言霊原理が隠没されなかった時代においては、ひふみ四十七文字は呪文でも比喻でもなく、立派な文章であったわけである。

宇宙精神にはたった五十の要素しかない。この五十の要素を理解し、人間の行為の一瞬をこの五十音の躍動として見る如果能够ならば、言霊の運用ならびに創造行為は自由無礙に行われる。いろは四十七文字が現象から、その根源の宇宙の自覚に帰る道（諸法空相）を解いたのに、対して

ひふみ四十七文字は一度宇宙即自身を悟った後にいかにしたら、その自覚のままに（アセエ）再びこの現象の世界に戻って活動することができるのかの方法（諸法実相）を、言霊そのものを使って述べた文章であるということができよう。またこの心の操作の反復練習が言霊子音を自覚する方法でもある。このような言霊運用の靈妙さを古代人は言霊の早振り、言の葉の幸倍へと呼んだ。

三千年来いやしくも日本神道に関心を持つ者なら誰でもその存在を知っていた石上神宮の布留の言本ひふみ四十七文字の謎は、このようにして解けた。崇神天皇の同床共殿の制度

の廃止以来、政治の実際の原理の地位から、信仰の対象の器物と成り下がった八咫鏡が、いま再び人間の、そして人類の行動の規範となる鏡の地位を取り戻した。

ひふみの布留の言本の布留とは「振る」の意味である。何を振るのか。伊勢神宮の五十鈴である言霊五十音を振るのである。伊勢神宮は言霊五十音を祀る宮、石上神宮はその五十音の操作の方法を秘蔵している宮である。五十音言霊を振って、「世界はただ一つの言葉なりき」の世界を再びこの地球上に創造することが日本民族の使命である。以上述べた日文四十七文字の解釈を説明を添えて天理市の石上神宮に送った。大分以前のことである。しかし、同神宮からは未だに何の応答も来てはいない。

その 414 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 14

その 414

俳句と和歌。

俳句と和歌を比べてみると、おのずとそこにニュアンスの違いがあるのに気づく。その相違の主点は何なのであろうか。字余りは別として、俳句は十七文字であり、和歌は三十一文字ということになっている。この数字には何か意味があるに違いない。このような俳句や和歌の基本に関することを、日本大和言葉の原理である言霊学の立場から考えてみよう。

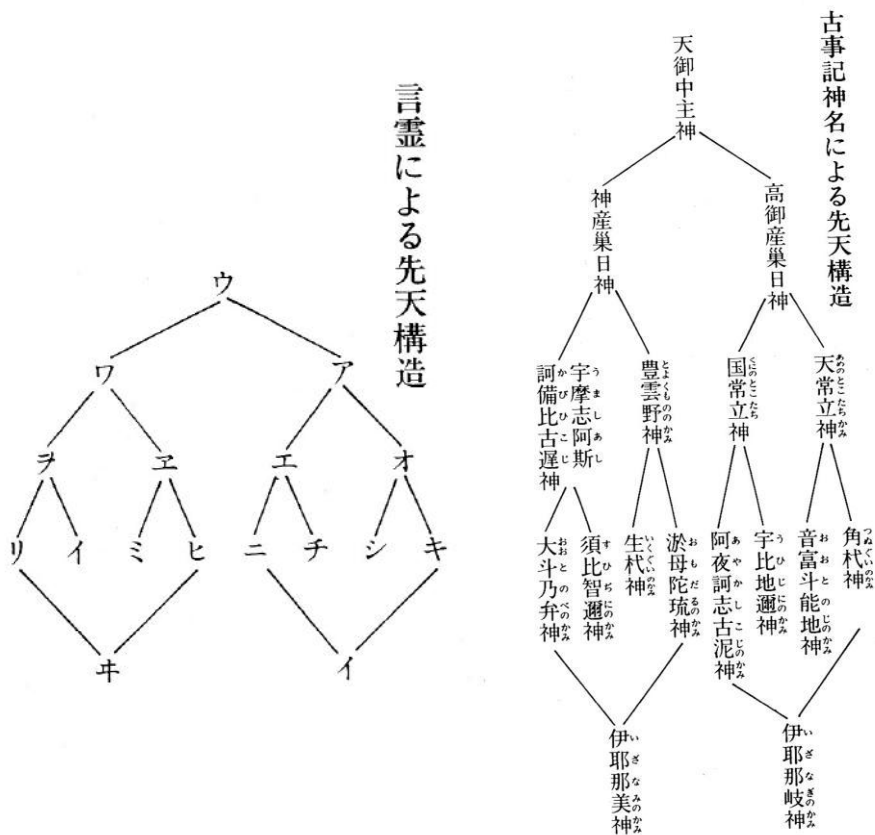
まず俳句であるが、俳句といえば、大方の人の頭に浮かぶのは？ 芭蕉の「古池や 蛙跳びこむ 水の音」の句であろう。芭蕉はこの句によって俳句の精神を会得確立したといわれている。句を構成している事物といえば古池・蛙・跳びこむ・水の音等日常なんだ変哲もない言葉であり、意味は古池に蛙が跳び込んでぼちやんと音がした、というだけのことである。

ところが「古池や 蛙 跳び込む 水の音」と、十七音文字にまると不思議にも句に接した人をポチャンと蛙が跳び込んだその波紋の中心に引き入れて、ひろいひろい宇宙空間から凝集して来た無限の波紋のごとく。あるいはその水音が長い長い永遠からの響きの如く、思わせ、感じさせます。この感じには神韻と言う形容が最もふさわしい。たった十七文字の句がどうしても素晴らしい力を持つのか。俳句の十七文字表現が人間精神の根本構造と密接な関係があるように思われる。

神韻とは、言外のまたは言葉の霊妙な韻のことである。「古池や・・・」と口をついて句が言葉にまとまって出てくる以前に、芭蕉の脳裏にはどんなことが起こっていたのか。それは本人以外の人を知る由もないことであり、本人自身さえ明確にわかっていなかったかもしれない。けれども、句の霊妙な韻は、句としてまとまる以前の芭蕉の脳裏に起こったことが大いに関係していることは確かである。言葉として表出してくる以前の消息は、人間の先天構造に関する。そこで心の先天構造についてあらためて考えてみることにしよう。

先天構造図参照

図 33



古事記神代の巻の冒頭の文を思い出してみる。「天地の初発の時、高天原になりませる神の名は、天の御中主の神、次に高御産巢日の神。次に神産巢日の神・・・」と続いている。この古事記の神代の巻の文章は神の名の呪示による人間精神の先天構造を解いているものであることは前に書いた。「天地の初発の時」とは精神宇宙の中にまだ何の意識も芽生えぬ、仏教のいわゆる空の世界のことである。

この何もない宇宙に何かある存在の芽といったようなものが生まれてくる。古事記は、この存在を天の御中主の神と神名で示す。「宇宙の中心の主人公の如き存在」といった意味であり。言霊ウである。

その415につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 15

その 415

次にこの存在が純粹の主体と客体とに分かれる。以下神名で示さず、直接言葉をもって示そう 言霊アとワである。アは吾の意識の出てくる根源の世界であり、ワは汝の意識の出てくる元の世界のことである。

アの世界は次に言霊オとエに剖（わか）れる。オは記憶能力の元の世界であり、エは記憶の中から言葉を選び出す能力の世界である。

言霊アに対応する言霊ワはヲとエに剖れる。ヲは記憶によって連結される対象物の元の世界であり、エはその中から選択された事物が属する根源の世界のことである。以上のウアワオエヲエ七音言霊は先天構成の要素であって、それ自体は決して現象として現出することはない。

次に別れて剖れて出てくるものは八つの父韻である。父韻とはウオアエの四母音に働きかけて現象を創造する。“きっかけ”の韻またはスパークといたらよかろう。この時創造のきっかけとなる八つのスパークがどんな順序で列ぶかによって、その創造行為が欲望を追求のものか、概念による学問行為か、芸術、宗教活動か、それとも？ 道德政治活動かが決定される。

その 416 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 16

その 416

俳諧活動は芸術行為であるから八父韻はチキリヒシニイミと並ぶはずである。

父韻の次に神韻が現出する。古事記の神名では、伊耶那岐・伊耶那美の二神である。頭の中で天御中主の神かから始まって現象として現れない種々の経緯をへて、十六番目と十七番目の伊耶那岐・美二神に至って、「いざと」人間の創造意志が働き、すべての現象が作り出されることとなる。

十六夜と書いて「いざよい」と読むのは、このことが語源である。人間精神の先天構造について、本論のおさらいをしたが、人間のあらゆる行為発言の以前に、上述のごとくつ脳内に十七個の言霊の活動がある。言い換えるならば、十七言霊をもって構成されている先天宇宙の全振動が起こって初めて人間の一挙手一投足が実現する。

このことを自覚する否かに関係なく現象の出現のためには宇宙全体の活動が必要であることは真理である。しかし人間はその原則に盲目であることをやめ、ついに自覚することによって最大限の力を発揮することができる。芭蕉は俳諧の道の幾多の模索遍歴の後に、「古池や・・・」の句を得て、俳句を生む宇宙の芸術的振動の十七音のリズムの奥義に到達したということができよう。古池やの五七五計 17 音が先天十七音言霊のリズムを見事に捉えることができたのである。俳句の精神の完成である。

もちろん芭蕉は言霊の原理の存在すら知ってはいなかったであろう。言霊隠没の時代が続いていたからである。にもかかわらず、彼はその俳諧の道の探求によって宇宙先天十七音の震動と同様のリズムも把握することに成功したわけである。とすると芸術活動が先天十七音のリズムと合致するという事は、どんな状態であれば可能なんだろうか。

その 417 につづく

島田正路著「言霊」より抜粋

言霊幸倍へ 17

その 417

一般的に言って二つの条件が考えられる。その一つは芸術的表現手巧の模索の末に、いったんはその手巧の壁を突破して広い広い芸術の根源宇宙である表現にとられる事なき自由な境地に飛び出すことによってである。禅で、空と呼び悟りと称する純粹美の世界への透脱である。この世界において、いわゆる色とは宇宙にみなぎる光の交錯であり、いわゆる音とは宇宙全体の震動が奏でる音楽なのである。芭蕉はこの世界を少なくとも垣間見ることができた人であった。

あらたふと 青葉若葉の 日の光

この境地の感得が言霊アであり、母音言霊の自覚に連なる境地である。

次にくる第2の条件は、その純粹美の自由な立場から、その境地を得るまで暗中模索していた表現的趣向の経験を再び構成し直して、俳句なら俳句のテクニクの修練をすることであり。その手段の追求が言霊父韻の配列の自覚に関係してくることとなる。美的魂の自由飛翔による表現手段の駆使の会得である。その完成体を言霊でチキリヒシニイミの八父韻の配列で表す。

上述のに条件は俳諧だけでなく、芸術活動一般に通用する原則であるが。俳句の場合は、その特殊性として、もう一つの原則を考えることができよう。それは五七五、計十七文字と心の先天構造である言霊の数十七との一致という点である。「古池や 蛙跳び込む 水の音」の句が示す光景は、単に古池に蛙が跳び込んでポチャンと音がした いま・ここ・の

一瞬の現象である。

俳句はその句の表現対象が物であれ、心であれ・いま・ここ・の光景である。俳句を作る人もそれを読む人も俳句は句の中に起こる現象のいま、この一点に誘い込んで、その一点を描写するのに十七文字を使う。と同時にその一点を現象たらしめる根本宇宙である十七言霊の活動リズムをも表現する。

このことから俳句の第三の原則は「常になるいま・ここを描写しながら、同時に、その現象が。生じてくる元の世界、すなわち。永遠の時の流れやで無限の宇宙の広さを、またはその感慨を言外に表現すること」ということができよう。俳句が季節を重んずるのも、宇宙の無限の永遠の営みを表現するための欠くことのできない手段であるからであろう。永遠の時の流れの中のいま・無限の広い宇宙のここ1点の表現—それが俳句の芸術性である。禅でいう「一期一会」はまた俳句の精神でもあろう。

その 418 につづく

島田正路著「古事記」より抜粋

言霊幸倍へ 18

その 418

芭蕉のほかに、子規の句をもう1つ。

柿食えば 鐘が鳴るなり 法隆寺。

私の好きな句の一つである。一点の雲もない。青く澄んだ空の下で。目に焼き付くような赤い柿にガブリつく旅人一人。そこに聞こえてくる日本人の心の故郷というべき遠い飛鳥

仏の法隆寺の鐘の響き。旅人の心は一人、儚くもまた明快である。正岡子規はもののあわれと生の確かさを二つながら知っていた人にであったに違いない。

ついで。和歌の話に移ろう。和歌は字余りは別として三十一文字である。和歌の道の事を昔、敷島の道といった。「敷島とは、日本やまとの国の別称。崇神天皇および欽明天皇が大和の国磯城（しき）郡磯城島に宮居（みやい）されたのに由来すると辞書に着せられている。磯はまた「いそ」と読む。五十のことである。敷島の道は五十城の道、すなわち五十音言霊の道ということであった。

現実に、日本の言葉の原理であり、人間精神の究極の法則であり、そして道徳政治の要諦でもあったアイウエオ五十音言霊の原理を自覚する修練の手段の一つとして、古代において、この三十一文字の和歌の道が教えられた。三十一文字を用いてひとつの情景を映し出し、その風物や心情の実相にどのくらい迫ることができるか、すなわち言霊アである感情を正確かつ濃やかに表現し得るかを修練すると同時に、その中に日本言葉の原典である五十音言霊の原理を隠れた意味内容として折り込んでいくことによって、その言霊の原理そのものを勉強するのが、敷島の道の目的であった。

例をあげてみよう。

長（なが）き世（よ）の遠（とお）の眠（ねふ）りの皆目覚（みなめざめ）め波乗（なみの）り船（ふね）の音（おと）のよきかな

という古歌がある。

この歌、驚くべきことに前から読んでも後ろから読んでも同じである。このことによって、人間の生命意識というものは、現実には今ここの一点のみ存在し、過去と未来はそのなか、“中今”の一点より見るとき、意識の配列の仕方の相違にすぎないという生命構造の法則の一端を暗示している。

それはさておき、歌の表面的な意味は「長い暗黒の世の中の遠い時代より続く眠りから人々が目を醒まし、社会全体が（仏教では大勢の人の心の乗り物を大乘と呼んでいる）時代の波を心持ちよく乗り切っていく姿は良いものですね」と言うほどのことになるであろう。これだけでは国家社会の将来に対する願望の歌ということに留まります。けれどもさらにこの歌の裏には言霊布斗麻邇の原理が折り込まれていることに気付く時、事態はいとも間近なものに思えてくる。

「遠の眠り」とは遠い時代からの眠りの意味であるが、これを「十（とお）の音振（ねふ）り」と置き換えると、言霊の意味が出てくる。「十の音振」とは五十音言霊図の横の音の配列、例えばア・タカマハラナヤサ・ワとかア・カサタナハマヤラ・ワとか言う父韻の配列のことであり、振りは運用の意味である。

言霊の横の音の配列は、人の心構えの持ち方すなわち発想から結果に到達するまでの心の運び方を表している。心の運用は言霊の音の降り方であるから音振りと呼ぶ。言霊の原理が隠没した時代は弱肉強食の覇道の暗黒時代であり、その権力主義の心の構え方がカサタナハマヤラである。この権力思想三千年の歴史の中から、十の音振りである言霊原理が「みんなめさめ」すなわち甦り、復活するならば、王道の政治の原理タカマハラナヤサの心構えによる恒久平和の世界がこの地球上に戻ってくる。まことに「音のよきかな」ということ

となる。世界平和を願望する歌の中に、その平和をもたらす唯一の方法をも秘示したものとして、和歌は古代において五十城島（しきしま）の道と呼ばれた訳である。

その 419 につづく

島田正路著「古事記」より抜粋

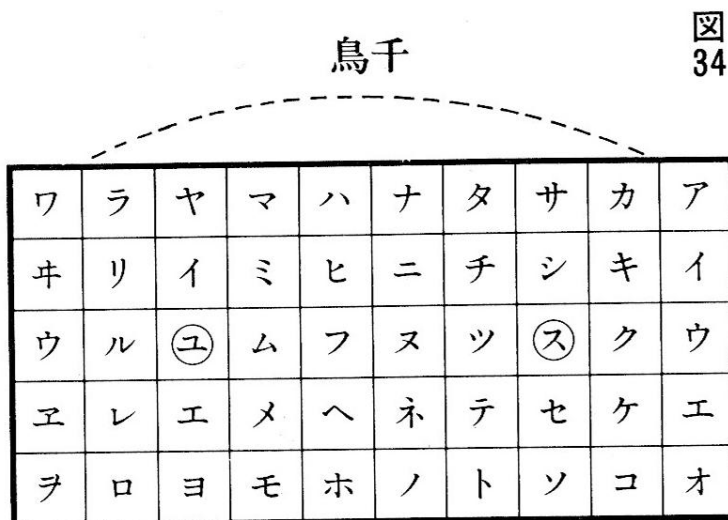
言霊幸倍へ 19

その 419

もう一つ例を付け加えよう。

あはぢしま通う千鳥のなくこえに いくよねざめぬ須磨（すま）の関守（さきもり）

これは百人一首にみえる歌である。表面の意味は「須磨の浜の関守男が淡路島に居る恋人のことを思って幾夜もねられぬ」という恋歌ということになる。と同時にこの歌は言霊の原理の重要な法則を裏に読み込んでいる。下の図を見てみよう。



古代神代の巻「島生み」の章に「淡路（あわじ）の穂（ほ）の狭別の島を生みたまひき。次に伊予の二名島を生みたまひきと・・・」とある。淡道（路）島とは言霊ア行とワ行の区域という意味である。アが主体、ワが客体。この主体と客体が感応同交して実相を生み出すのだが、その主と客とを結ぶ道、言霊学で言う父韻の働きを、古代人は千鳥（道鳥）またはその他の鳥の名で表現した。主体と客体との間に飛ぶ思いの火花を鳥に喩えたわけである。言霊学で言う子音である実相を生み出す先天の母音と半母音と父韻の動きを「あわぢ島通う千鳥のなく」と歌い込んだのである。

物事を主と客から判断して実相を生むということは、また言霊学で言えば言霊イを操って世（よ）の音（ね）をさます。（起こす）ことともなる。「幾夜寝覚めぬ」と「いを繰り合わせて世の実相の音を起こす」とを同時に歌いこんだことである。

次に「須磨の関守」のスマはスの間。の意。のの五十音図の向かって右半分の中心にスの字がある。左の中心はユの字がある。このことから五十音図、右半分を「スの田」または「スの間」と言う。左半分は「ユの間」又は「ユの田」（ユダ）と呼ぶ。すでに、お分かりのごとく、ア行に近い方が主体性・精神性を表し、ワ行に近い方が客体性・物質性を表している。またスとは静・巢・主として、中心に動かずにあるもの、古代においては政治の上で天皇の座を意味した。

かくみてくるとこの恋歌は裏に「客観状勢を見極めながら言霊学の法則に従って苦心して政治を運営しておられる天皇」という内容を秘示していることになる。

その 420 につづく

島田正路著「古事記」より抜粋

言霊幸倍へ 20

その 420

わずか二の例では詳しくわかりいただけないかもしれないが、和歌が言葉の誠の道・敷島の道として抒情歌としては言霊アの実現に務めながら同時に言霊学の修練（言霊イ）の道でもある時代があったことを示したわけである。このような歌は万葉集から古今集にかけてよく見ることができるが、新古今集になるとほとんど見られなくなる。文献としてはもちろん口伝えとしてでも言霊の学問がこの世から完全に隠没されてしまった証拠であろう。

近代になって言霊学の存在に気付かれた第一人者は明治天皇であった。天皇の御製の中に数多くの言霊のことを詠んだ歌を見出すことができる。

天地も動かすはかり言の葉の誠の道を極きわめてしかな

白雲のよそに求むな世の人の誠の道そ敷島の道

聞き知るはいつの世ならむ敷島の大和言葉の高き調（しらべ）を

ついでに枕言葉のことに触れておこう。昔の和歌には枕詞というのがあって、あらゆる事物を歌いだすために、その事物の上に付してその事物を強調する役目を持っている。それらの枕詞の中には国文学者によって、「語彙不詳」として片付けられているものが相当数存在する。例えば奈良の枕詞である「あおによし」である。しかし、言霊学から見ると和歌の枕詞には確固とした意味があることが明瞭に理解される。「あおによし」とは、言霊アは芸術宗教の領域であり、言霊オは、学問分野のことである。奈良時代は芸術・宗教・学問の花が一度に開いた時代であった。昔はア・オと言え、その一音一音の意味が一般に理解されていたのである。

新古今以降和歌の中へ言霊の原理を歌い込むことは完全になくなったしまったけれど、言霊原理の数の方の原理は現代まで残っている。

和歌のことを三十一文字（みそひともじ）ともいう。言霊五十音を区分すると先天である母音・半母音・父韻と親音を合わせて計十七。後天実相音三十二。文字化を加えて総合計五十である。

和歌の三十一字実相子音の数理を意味する。現実の実相音である三十二子音の一つ足りない。その一は和歌を詠む作者自身の心である。この欠如の一があるからこそ、和歌の表現が千変万化・自由無碍であり得るのであろう。

以上俳句と和歌について思いついたままを述べてきた。近年、俳句や和歌についていろいろな議論が起こってきている。けれど長い間、この日本に生まれ育ってきた俳句と和歌に何か一本厳粛な筋が通っていない限り、伝統とは言えないのではないだろうか。十七文字の俳句は、その数が人間精神の先天部分を構成する言霊の数十七と一致する。それゆえ人間精神の空相である先天宇宙が躍動を起し、今ここにおいて現象を生み出すその一点の描写から、遡って元の先天宇宙の時間・空間の無限を表現することが眼目であり、和歌三十一文字はその数が後天音数であることから現実実相の細やかな抒情・抒景（注1）が目的であるといつてよいであろう。

注1： 抒景：風景を詩文に書き表すこと

その 421 につづく